

第Ⅲ期「仙台・羅須地人協会」連続文化講座 第10回
2025年7月5日(土) 13:30-15:30 於 シニアネット仙台 会議室

評議会制、宮城県美術館現地存続運動、そして…

—アーレント『革命論』から学べること—

森 一郎 (東北大学)

1 関連資料と拙論、および推薦図書

関連資料と拙論：

- ①東北大学日本学国際共同大学院シンポジウム記録集『公共性と美術館の未来』
(東北大学日本学国際共同大学院発行、2020年8月28日)
https://cms.gpjs.tohoku.ac.jp/media/files/_u/event/file2/pzzmlb0yz.pdf
- ②森一郎「震災後の宮城、仙台にて日々是哲学する——作ることの時間性と、公共的歴史性」
(『東洋学術研究』第60巻第2号、東洋哲学研究所編・発行、2021年11月20日、所収)
- ③同「革命とは何だろうか——アーレントの政治哲学の問題」
(『東北哲学会年報』第38号、東北哲学会編、2022年5月25日、所収)
https://www.jstage.jst.go.jp/article/tpstja/38/0/38_47/_article/-char/ja/
- ④同「権力、権威、憲法——アーレント『革命論』を現代日本で読む」
(『東洋学術研究』第62巻第2号、東洋哲学研究所編・発行、2023年11月30日、所収)
- ⑤同「評議会制と革命精神——宮城県美術館現地存続運動から学んだこと」
(『思索』第56号、東北大学哲学研究会編、2023年11月2日、所収)
<https://tohoku.repo.nii.ac.jp/records/2000316>

推薦図書：

- 1.『みんなでもった美術館 宮城県美術館の現地存続運動全記録』(宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク編・発行、2021年6月30日刊。宮城県美ネット STORE (<https://miyagikenbinet.stores.jp>) で購入可、頒価2,000円+送料)
- 2.『えっ！ ホントに壊す!? 東京海上ビルディング 超高層ビルさえ消耗品にしまっ
ていいの』(TMBを愛する会編、建築ジャーナル、税込2,200円、2022年2月11日刊)
- 3.『宮城県美術館 誕生から移転断念まで 未来へつなぐ40年の軌跡』(大和田雅人著、プランニング・オフィス社、2022年5月26日刊。プランニング・オフィス社(022-266-9453)にFAX:022-266-9418にて注文、書店でも発売、1,500円+税)
- 4.『喪われたレーモンド建築 東京女子大学東寮・体育館』(東京女子大学レーモンド建築東寮・体育館を活かす会編、工作舎発行、2012年、税込2640円)
- 5.『未完の建築 前川國男論・戦後編』(松隈洋著、みすず書房、本体6,800円+税、2024年12月2日刊)

2 アーレント『革命論』について

- ・ハンナ・アーレントのテキスト：

Hannah Arendt, *The Human Condition* (1958), The University of Chicago Press, Paperback, 1989
 (『人間の条件』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1994 年。牧野雅彦訳、講談社学術文庫、2023 年)

ー, *Vita activa oder Vom tätigen Leben* (1960), Piper, Taschenbuchsonderausgabe, 2002
 (『活動的生』森一郎訳、みすず書房、2015 年)

ー, *On Revolution* (1963), Penguin Books, New York 1990
 (『革命について』志水速雄訳、ちくま学芸文庫、1995 年)

ー, *Über die Revolution* (1965), Serie Piper, München, 1994
 (『革命論』森一郎訳、みすず書房、2022 年 4 月 18 日)

- ・2014 年に東京女子大から東北大に異動し、翌年、『人間の条件』のドイツ語版『活動的生』の日本語訳を出した。その次に取り組んだのが、『革命について』をドイツ語版から日本語に翻訳する仕事。東北大の学生と一緒に読みながら訳出を続けてきた。足かけ七年かけて、2022 年 4 月によりやく拙訳書を出すことができた。
- ・『革命について』もしくは『革命論』は、姉妹編の『人間の条件』もしくは『活動的生』に次ぐ、アーレントの哲学的名著にして現代哲学の古典。
- ・『革命論』は、その名の通り、「革命」という近代の大いなる出来事を正面から論じており、現代における政治哲学の可能性を拓くうえで資するところ大。
- ・「政治」とは、「権力」とは、「民主主義」とは、「憲法」とは、そもそも何であろうか、という問題を原理的に究明しており、混迷を深めている現代日本の政治状況を考えるうえで、またとない示唆を与える。
- ・続いて、『革命論』の内容を解説する拙著『アーレントと革命の哲学』を、2022 年 12 月に出した。今回は、その本の内容の最後のほうに関連してお話しさせていただく。
- ・『革命論』の最終第六章「革命の伝統と、革命精神」は、本書中最も長い章であり、アーレントが、革命的な「新しい政治形態」として「評議会制」を大胆に打ち出した重要箇所である。それだけに理解が難しい。今回は、その箇所の読解の補助線として、2020 年に宮城県で起こった「宮城県美術館現地存続運動」という具体例を取り上げる。
- ・私は、身近な出来事にふれて考えさせられたことを、哲学上の大問題に取り組むうえでのヒントにし、そこで得られた哲学的視点をたずさえて、また日常の現場に戻るという往還の作業を、「日々是哲学」と呼んでいる。本日のお話もその一環。

3 『革命論』第六章の「評議会制」について

- ・本日のメインテーマの一つ「評議会制」もさることながら、その前提にして大枠である「革命精神」とは何のことか、分からないという方も多いと思うので、そちらから話を始める。テーゼ風になってしまうのをご了承ください。(アーレントの革命思想に関しては、拙論【③】【④】がある。本日のお話の全体は、拙論【⑤】の内容に沿ったもの。)

- ・革命は、「自由」を本義とする¹。では、自由とは何だろうか。
- ・束縛からの「解放 Befreiung, liberation」ではない、積極的・活動的な「政治的自由」を、アーレントは「自由のうちで行為すること In-Freiheit-Handeln」²と呼ぶ。そのような自由な行為が演じられる共同空間を創り出すことが、「自由の構成」³である。
- ・自由な共同体の立ち上げ自体、自由な行為の最たるものであり、それは、人びとがともに力を合わせることによってはじめて成し遂げられる。そのような行為する人びとの間に積極的に働く力のことを、アーレントは「権力 Macht, power」と呼ぶ。
- ・そのような「人間力」を発揮するとき、ひとは喜びを覚え、幸福を味わう。私生活の幸せとは異なる、共同で行為する者たちの享受する至福を、「公的幸福」と呼ぶ。
- ・アーレントによれば、「革命」とは、そうした「政治的自由」と「公的幸福」を追求する共同体の「創設 Gründung, foundation」のことなのである。
- ・アメリカの独立と建国は、まさにそのような創設の出来事だったのであり、それをアーレントは——当時の言葉遣いに倣って——「アメリカ革命」と呼ぶ。
- ・革命の人びとを鼓舞する「革命精神」とは、政治的自由を重んじ、公的幸福に生きること
をよしとする^{スピリット}志のことである。
- ・そのような「初心」に突き動かされたアメリカ革命が、一定の成功を収めたのは、それ以前の植民地時代に人びとが「町や村の民会」や「町の公会堂集会」で政治的自由の経験を積んでいたから。そこで味わった公的幸福を追求すべく創設された公的空間が、「アメリカ共和国」——アーレントはアメリカ合衆国をこう呼ぶ——だった。
- ・だが、いったん革命が成功すると、共和国の繁栄とともに、その初心は次第に忘れられてゆく。「私的幸福」がもっぱら追求され、「経済的自由」が謳歌されるばかり。
- ・共和国の原点であった革命精神を忘却から救い、保持していくために、建国の父の一人、トマス・ジェファソンが提案したのが、「区制 ward system」であった。
- ・地方の小単位「区」に自治権を与えて合議体の「小共和国」群となし、そこからボトムアップ式に形成された人民の^{パワー}力を、アメリカ共和国の活力の源泉にするという着想。
- ・公共の事柄に関心をもつ人びとが自発的に集まり、意見を交わし、自分たちにできることを話し合って決め、一致協力して事を為すこと、そして自分たちの言論を公的に発信し、それに呼応する他の人びとと連帯の輪を広げていくこと、ひいてはそれを政治体制の根本に据えること、それがアーレントの言う「評議会制 Rätssystem, council system」である。ジェファソンの提案は、まさにそれを先取りするものだった。

¹ アーレントは、フランス革命の人びと——とくに名前が挙げられているのはロベスピエールとコンドルセ——が、「革命とはその本質からして自由をめざすもの」（『革命論』訳書 30 頁）だとしたことを重んじ、それを一貫して堅持している。

² 訳書 32 頁。英語版では「自由であること being free」といった言い方が見られる程度だが（*On Revolution*, p. 34）、ドイツ語版では、ハイデガーの「世界内存在 In-der-Welt-sein」ばりの強い表現が使われている。

³ 「自由の構成」を意味するラテン語 CONSTITUTIO LIBERTATIS は、第四章「創設」の副題であり、まさに革命の本体を言い表わす言葉である。

- ・ジェファソンのみならず、評議会という現象は、近代の革命史のあちこちに見出せる。
- ・フランス革命期のパリの^{セクション}「区」（第一次パリ・コムューン）と 1871 年のパリ・コムューン。1905 年のロシア第一革命と 1917 年のロシア第二革命（二月革命）。第一次世界大戦後にはドイツでも革命が起こり、バイエルンでは「評議会共和国」が宣言された。
- ・いずれも、革命の真ただ中、至るところに「評議会 Sowjets, Räte」が自発的に形成され、人民の政治参加のうねりが広がった。
- ・人民主体の「新しい政治形態」を志向するこの真に革命的な現象は、政党や議会によって邪魔者扱いされ、壊滅させられながらも、革命の伝統に絶えず付きまどってきた。
- ・アーレントは、評議会制が純粋な形で現われたのが、1956 年のハンガリー革命だとする。皮肉にも「ソヴィエト軍」によって鎮圧されてしまったこの悲劇的事件を、リアルタイムで伝え聞いたアーレントは、そこに革命精神の地下水脈のほとばしりを見出し、そこからみずからの革命論のモチーフを掴みとった。
- ・その後も、人民の政治参加要求が草の根から発せられるとき、つねにそこには「評議会」的なものが萌している、と見ることができる。

4 宮城県美術館現地存続運動が革命論とどう関係するのか

- ・以上、ごく荒っぽくアーレントの「評議会制」論を紹介した。
- ・では、2020 年の宮城県美術館現地存続運動とりわけ「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」（「県美ネット」と略）の活動が、それとどこまで関係するだろうか。
- ・それについて考える前に、私にとっての県美運動前史に寸言したい。
- ・私は 1990 年代後半、『革命について』を東京女子大の哲学演習で講読し、感銘を受けた。のみならずその後、アーレントの革命論をいわば実践する機会に恵まれた。「ハイデガー・フォーラム」の創設がそれである。
- ・現代日本の哲学研究の閉塞状況を打破すべく自由な討議の場を拓こうと、ハイデガー哲学研究仲間で相談して、日本各地の哲学研究者に呼びかけたところ、200 人もの賛同者が集まり、2006 年 9 月に第 1 回大会を開いた。2025 年秋に第 20 回大会を開催予定。
- ・志を同じくする者たちが集まり、問題意識を共有しつつ、新しい会の創設をめざして広く発信すると、その呼びかけが広がっていき、連帯の輪が形成されることを、肌で感じた。人びとが集まってそこにみなぎるエネルギーの計り知れなさを思い知った。
- ・生活の必要に迫られてではなく、みずから進んで新しい共同事業の立ち上げに参画する者たちは、率先して知恵を出し合い、気前よく実務をこなし、その活動自体を愉しんでいるように見える。まさにボランティア精神そのものだと思った。
- ・それと似たことが、次いで東京女子大でも起こった。1924 年竣工のアントニン・レーモンド建築の「旧体育館」（略称「旧体」）を、キャンパス再開発のために解体するという計画が発表されると、解体再考を求める声が学内外に沸き起こったのである。
- ・真っ先に声を上げたのは、往年の卒業生たちのグループだった。学内の動きは鈍かったが、在学生有志が旧体存続を願って、レーモンド建築校舎の研究を発表すると、それに感化された教職員（私もその一人）が、遅まきながら立ち上がった。

- ・建築方面の専門家のみならず学外の有識者や一般市民からも協力を得て、2009年3月には旧体解体再考シンポジウムを、その旧体を会場として開催した。
- ・教授会で毎回、旧体問題は議論され、教員メーリングリストでも盛んに意見交換された。
- ・あと一歩、というところまで運動は盛り上がったが、理事会は強硬姿勢を変えず、2009年6月、旧体は解体された。今は、芝生広場が空漠と広がるのみ。
- ・しかし当時、私は、卒業生、在学生、教職員、有識者、一般市民らがそれぞれの見地から意見を述べ合うグループを形成し、グループ相互間で連絡を取り合って連帯し、一致団結して行動を起こすと、どれほど強力なパワーが発揮されるかを目の当たりにした。
- ・とてもありそうにないことが現に起こった、この奇蹟をもたらしたのは人びとの団結力だ、と思った。これこそアーレントの言う「評議会制」ではないか、と。
- ・東京女子大学体育館解体再考運動自体は挫折したが、その活動の輝きはいつまでも失われないだろう。卒業生有志が総力を挙げて編集・刊行した記録集【4】も貴重。
- ・その後仙台に流れ着いた私が出会ったのが、宮城県美術館現地存続運動だった。この県民運動の詳細は、県美ネットの記録集【1】や大和田雅人氏の著書【3】に譲る。
- ・旧体運動の最盛期は2009年前半の半年足らずだったが、その期間に凄まじく様々なことが起こった。それと似て、県美運動が繰り広げられたのは、2019年12月から2020年11月までの一年弱。コロナ禍最初期の^{なぎ}風の期間を除くと、前半3カ月、後半5カ月にすぎない。その正味8カ月の間に驚くほど多くのことが起こり、濃密な時間が流れた。
- ・まず初期の動きが速かった。2019年11月16日、宮城県美術館の移転計画が報じられると、美術館を愛する県民の間に動揺が走った。11月下旬から河北新報に移転反対意見が掲載され始め、12月には建築保存運動の市民グループや建築関係の団体から宮城県に対し美術館現地存続の要望書が出された。12月末には県美移転問題に関心を寄せる市民が100人集まって意見交換を行なった。市民有志によるアンケートも年内に行われ、1月には署名運動が本格化、2月には17,773筆が集まり、県議会議長に提出された。
- ・経緯をたどっていくとキリがないので、ひとまず、私が関係した東北大関連に話を絞る。
- ・12月中の準備ののち年明けから本格化した東北大関係者の連携も、動きが早かった。
- ・東北大関係者の「宮城県美術館の移転計画中止を要望する有志の会」が結成され、その呼びかけに呼応した大学関係の賛同者が3週間で150名を超えたのは、驚きだった。野家啓一先生に有志の会発起人代表になっていただいたことも大きかったが、あれよあれよという間に連帯の輪が広がっていくのを、事務局を担当した私は目の当たりにした。
- ・有志の会では、1月23日に五十嵐太郎氏の講演会「見えない震災からリノベーションへ」を行ない、100人ほどの聴衆を集めた。1月27日には、150名超の賛同者名を並べた要望書を県に提出して、記者会見を行なった。
- ・そして2月15日には、日本学国際共同大学院シンポジウム「公共性と美術館の未来」を開催、200名もの参加者が県美移転問題という公共の事柄について語り合った【①】。
- ・ところが3月になると新型コロナウイルス感染が広まり、4月には緊急事態宣言が出た。東北大有志の活動は、いや県美運動全体が、足止めを食らった恰好となった。
- ・その間にも粛々と計画を進める県の動きに対抗しようと、市民有志が連絡を取り合い、慣

れないオンライン会議を重ねた。コロナにめげず対面でも作戦会議を何度か行ない、7月21日、「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」の設立総会が開かれた。

- ・県美ネットは、県美移転問題に関心を寄せる各々のグループや団体が共同代表を出して、一つのより大きな団体を形成し、県美現地存続を願ういっそう多くの人びとの力を集めて、全体として宮城県に計画中止を働きかける市民の自主連帯組織だった。
- ・一方では、もちろん宮城県議会でも、県民の関心事である美術館移転計画は論議的となったから、問題意識を共有する県議会議員との連携は、県美ネットの重要課題であった。ここでは、市民活動は県政レベルの政治活動に連なった。
- ・旧体運動の時にも、東京都議会議員や杉並区議会議員等との連携可能性を探ったが、一私学内部の問題とされてしまった感が強い。県美は、宮城県有施設であり、その存廃に県民の関心が強かったので、県議会議員も無視はできなかった。私も党派にこだわらず県議と接触し、県議会議員全員にシンポジウム記録集【①】を配付した。
- ・他方では、県民に広く問題意識を共有してもらうために、県美ネットは県内運動を各地で展開した。9月から11月にかけて週末のたびに手弁当の「出前講座」が開かれ、市や町の住民が数十人規模で集まり、膝を突き合わせて濃密な学習会を行なった。このタウンミーティングの試みは、県内に連帯のネットワークを確実に広げていった。
- ・9月19日には県美ネット第1回シンポジウム「まちの記憶を育てる」が開催され、会場のせんだいメディアテークには、コロナ感染対策のうえで対面参加者150名が集まった。
- ・毎週土曜には県美を散策する写真撮影会が開かれ、10月20日～25日には県美の県民ギャラリーで「美術館のある川内の風景を描く250人展」が催された。もともと「100人展」として計画された市民による絵画展覧会は、予想をはるかに上回る盛況となった。
- ・気がつくやうに、県美ネット会員数は、設立当初の30人から、11月上旬には2,000人を超えていた。個人会費1,000円として、相当額の浄財が集まったことになる。
- ・県美ネットの活動をもう一方で支援してくれたのが、河北新報。社説で何度も県美移転問題を取り上げ、要望書や質問書が県に提出されるたびに、また県美関連イベントが開催されるたびに丁寧に記事にしてくれた。投書欄には連日のように県美を愛する市民の声が掲載された。県民の間に問題意識を浸透させる地元紙の威力を思い知った。
- ・さらには、県美ネットのメールニュースやSNSによる発信も盛んに行なわれた。新聞という従来型メディアと、新電子メディアの双方が持ち味を発揮した。
- ・その他、県美をめぐる大小の動きが県内の至るところで発生し、11月上旬にはほとんど見渡すことができないほどの盛り上がりとなった。10月から始まった2回目の署名運動も、街頭署名活動を行なって、前回は凌ぐ勢いで筆数を集めていった。
- ・さすがの宮城県知事も――翌年の知事選を控え、天秤にかけてか、――移転計画発表からちょうど1年後の2020年11月16日、計画撤回を発表した。

5 宮城県美術館現地存続運動から学べること

- ・この顛末に私自身は、「東京（旧体）の仇を仙台（県美）で討った」と喜んだ。ともかく、人生の中でもまれにみる貴重な体験を、思いがけずさせてもらった。

- ・のみならず、県美運動を体験してアーレントの「評議会制」論への理解が深まった。
- ・まさか県美運動方式をそのまま評議会制と同一視するつもりはないが、アーレントの革命論には、机上の空論と片付けることのできないリアリティがあるとの確信を深めた。
- ・アーレントは、革命史上に発生した評議会の具体例を幾つも挙げている。それら世界史的規模の事例に比べれば、県美運動はあまりに微小なケースではある。
- ・県美運動の主力であった県美ネットにしても、革命志向とはとても言えず、それを「革命的評議会」と称したとしたら、参加者自身からも抵抗を受けることだろう。
- ・しかし、アーレントの言う「評議会制」なるものは、じつはそれほど敷居の高いものではない。彼女は評議会制を、啞然とするほど身近なケースで考えている。
- ・たとえば、よく知られたインタビューで、アーレントは、評議会は「とても小さなところから始め」て考えればよいのだとし、「近隣評議会、専門職評議会、工場内評議会、アパート評議会」といった具体例を挙げて、さらにこう語っている⁴。
「評議会はつぎのようにいうのです。われわれは参加したい、議論したい、公衆にわれわれの声を聞かせたい、そして、わが国の針路を決定しうる可能性をもちたい。国はわれわれみんなが集まってわれわれの運命を決するには大きすぎるから、そのなかにかくつかの公的空間が必要なのだ〔、と。…〕たった一〇人でもテーブルの回りに腰掛けて、めいめい自分の意見を表明し、他人の意見を聞かならば、そうした意見の交換を通じて理性的な意見の形成がなされる。」
- ・10 人が円卓を囲んで意見を述べ合うといったごくささやかな規模で、「評議会」をイメージしてよい、というのだから驚きである。
- ・だとすれば、たとえば、地元の衰退に危機感を抱く隣近所の住民有志が公民館に集まって、町おこしのための意見を述べ合い、合議によって基本方針を決め、自治体に働きかけるとするなら、それは立派な「近隣評議会」だということになるろう。
- ・アーレントが高く評価しているアメリカ植民地時代の「町の公会堂集会 townhall meeting」にしても、住民が自分たちの町の運営について話し合う自治組織のことだった。
- ・もちろん、市町村や区といった地方行政組織の既定のルールに乗って、住民が自分たちの私的利害のために陳情するにとどまるとすれば、その団体を「革命的評議会」と呼ぶことはできない。あくまで、公的関心事について参加者が自分なりの意見を表明し合い、共同参画する意思をもつ、というのでなければならない。
- ・その身近な町づくり論議が、行き着くところ、国のあり方を問うほどの公的意義をおびるという自覚のもとに建設的な意見形成がなされ、それが何らかの仕方で公的言論として表明される、ということを要するのである。
- ・そのような事例なら、じつは現代日本にも少なからず生じていよう。そして、県美運動をその一例として意義づけて何らさしつかえない。

⁴ Hannah Arendt, “Thoughts on Politics and Revolution”, in: *Crises of the Republic*, Harcourt Brace & Company, 1972, p. 232-233／山田正行訳「政治と革命についての考察」、『暴力について 共和国の危機』みすず書房、2000 年、所収、232-233 頁。

- ・思うに、「仙台・羅須地人協会」も、自主独立の言論共同体として、一種の人民評議会と言ってよいだろう。さらに言うと、宮沢賢治が地元の若者たちと集い、語らったという、元祖・羅須地人協会にも、評議会的な自由が輝いていたと想像したくなる。
 - ・とはいえ、県美運動は、美術館移転計画への異議に特化した運動だったのであり、それを革命的評議会と同列に論じてよいのか、との疑義が呈されよう。
 - ・これに対しては、アーレントが『革命論』第六章の第Ⅲ節の最後のほうで紹介している、「区制」の提唱者ジェファソンのコメントが参考になろう。
- 「初等共和国が引き受けるにふさわしい本来の機能とは、いったいいかなるものであるべきか」という、区制を具体的に実現するには当然聞きたくなる疑問に対して、ジェファソンはこう答えたという。——「「どんな目的でもよいから、特定の目的のために〔区〕を始めてみるだけでよい。そうすれば、区がそれ以外のどんな目的に最も役に立つであろうか」が、たちまち分かってこよう、と」。(『革命論』333頁)
- ・どんな目的のためでもよいから、とにかく、人びとのローカルな合議体に権限を与えれば、それがどの方面でパワーを発揮するかが分かるだろう、というのである。
 - ・少なくとも、町づくりのための合意形成という目的のためには、住民同士の自発的な話し合いが効力をもちうることを、県美運動は実証してみせた。
 - ・町づくりについての合意形成を、些細なことと見くびることなかれ。政治的なものの起源は、古代ギリシアの自治都市「ポリス」にある。そこでは、市民が共同で市の運営にあたった。中央集権的支配ではない、ローカルな町づくりにこそ、政治的なものの原点はある。ジェファソンは、区という「初級共和国」こそ共和国全体の基礎だとした。
 - ・このように県美運動から住民の政治参加のパワーを学ぶことができる。しかしそれだけではない。永続的であろうとする革命精神を保持し続ける組織や制度を築くことの困難さも、学ぶことができる。というより、現に学んでいる。
 - ・アーレントによれば、他の革命に比べてアメリカ革命は際立った成功を収め、それによって創設された共和国は今日なお存立しているが、そのアメリカ革命も革命精神の保持という点では失敗したという。革命精神が忘れられたことを何より示すのは、アメリカ合衆国が革命によってできた国だという記憶が消えていった事実である。
 - ・建国の父の一人、ジェファソンは、革命後のアメリカの繁栄のなかで革命精神が消えつつあることを共和国の危機だとし、その再興を願って「区制」を発案した。そして、アメリカ憲法の中に、評議会制を共和国の基礎として書き込むことを夢見たのである。
 - ・しかしその夢は叶わなかった。かくも革命精神の保持は困難なのである。
 - ・新しい始まりをひらくことは難しいが、もっと難しいのはそれを新しい始まりとして保持し続けることである。時間による消耗に抗して、抵抗し続けなければならない。
 - ・たとえば、ハイデガー・フォーラムも、創設されて20年近くが経過し、維持が次第に難しくなってきた。当初のエネルギーは低下し、世代交代は思うように進んでいない。
 - ・旧体運動の場合、組織は消え、メンバーは散り散りとなり、学内での記憶は失われた。
 - ・解体工事直前に立入禁止の旧体に入ったとの名目で教職員7名が懲戒処分を受けたため、処分撤回を求める関係者の努力は、逆に継続した。ついに2020年3月、東京地裁で大学

理事会との和解が成立、処分は撤回された。慶事ではあったが、その直後からコロナ禍が始まったこともあり、旧体運動を担った人びとの連帯は消え去りつつある。

- ・ 県美運動は、一年後にハッピーエンドを迎えたが、唐突にピリオドが打たれたことを残念に思った人もいた。あの盛り上がりはもう二度と戻ってこない郷愁に襲われることもある。そこには新しい始まりが確かにあったが、その勢いを維持することは難しい。
- ・ 革命史上の評議会制にしても、革命のさ中に猛然と沸き起こった評議会やコミューンは、やがて粉砕されたり懐柔されたりして、歴史の闇にみるみる消えていった。
- ・ だが、革命精神は、忘れ去られたかに見えて、革命が起こるたびに不死鳥のように蘇ってきた。アーレントがその勃発をリアルタイムで考察したハンガリー革命ののちにも、さまざまな革命運動が起こり、そのたびに評議会制は輝きを取り戻している。
- ・ それゆえ肝要なのは、評議会制という失われた宝を記憶にとどめ、絶えず物語り、後代に語り継いでゆくことである。『革命論』はその一つの試みだった。
- ・ 旧体運動に関しては、東女大卒業生の有志の会編著の記録集【4.】がある。哲学科卒業生の劇作家オノマリコ作の「解体されゆくアントニン・レーモンド建築 旧体育館の話」は2011年の初演以来、繰り返し上演されてきた（映画化の話も聞くが…）。脚本は、ネットでも読める。<https://playtextdigitalarchive.com/drama/detail/366>
- ・ 県美運動では、県美ネットの記録集【1.】や、大和田氏の著作【3.】が生み出された。
- ・ 宮城県美術館は2021年秋、開館40周年を迎えた。祝賀イベントを催した県美ネットつまり「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」は、2022年3月に改組し、「宮城県美術館の百年存続を求める市民ネットワーク」として再スタートした。
- ・ 2023年から宮城県美術館はリニューアル改修工事に入り、目下休館中。再オープンの際には、記念イベントが盛大に催されるだろう。県民に愛される文化施設であり続けるには、ねばり強い物的、人的メンテナンスが今後必要となる。
- ・ 2020年の県美運動を絶大に支援してくれた建築史家の松隈洋氏は、2024年12月、『未完の建築 前川國男論・戦後編』を、みすず書房から出版した。【5.】
- ・ 前川建築研究の第一人者によるこの600頁超の大著のあとがきには、宮城県美術館現地存続運動とその成果が紹介されている。
- ・ その刊行を記念して、2025年5月10日、東北大学日本学国際共同大学院シンポジウム「宮城県美術館、都市景観の未来、そして前川國男の遺産」が開かれた。
- ・ 松隈氏や五十嵐氏、県美ネット共同代表の西大立目祥子氏、野家氏、さらに佐藤忠良記念館を設計した建築家の大字根弘司氏らが登壇し、県美運動の総括が行なわれた。
- ・ こうしたイベントも、県美運動を語り継ごうとする努力の一つである。

6 メンテナンスという未来志向、そして……

- ・ 同じ前川國男建築では、東京丸の内の東京海上日動火災本館ビルディング（1974年竣工）の建て替え計画が2020年に発表され、この問題をめぐって編まれた論集【2.】には、県美運動の同志が数多く寄稿し、連帯の輪の健在ぶりを実感させた。
- ・ しかし、前川の代表作の一つであったそのビルは、無残にも解体されてしまった。

- それ以外にも、近代建築メンテナンス問題は各地で無数に噴出しており、宮城、仙台でも、この問題に関連して県民、市民が語り合うべきことは数多い。
- そしてそこには、評議会的な言論共同体の出番があつてよいだろう。
- たとえば、石巻では、支倉常長の慶長遣欧使節の木造帆船を再現したサン・ファン・パウティスタ号（竣工 1993 年）が、東日本大震災の津波を耐え抜いたのに、築 30 年も経たずに解体されてしまった。他方、日本最古の木造教会、旧石巻ハリストス正教会堂（1880 年竣工）は、築百年後の 1980 年に解体を免れて移築され、3・11 で被災するも持ちこたえて再び修復され、2018 年に復活を遂げた。
- 戦後復興の中で市民、県民が並木を育ててきた定禅寺通りに立つ宮城県民会館（1964 年）、仙台市民会館（1973 年）は、すでに用済みの宣言を受けている。戦争の記憶を後世に伝えようと戦後復興の総仕上げとして建てられた仙台市戦災復興記念館（1981 年）すら、新市民ホール建設計画のあおりで用済みにされようとしている。
- 以上に関しては、拙論「震災後の宮城、仙台にて日々是哲学する——作ることの時間性と、公共的歴史性」【②】を参照。
- さて、ここからが「そして……」の話となる。
- メンテナンスの概念をより広くとれば、日本国憲法を今後どう受け継いでいくか、という課題も一個の大いなるメンテナンス問題であろう。市民同士で活発な意見形成が行なわれることが重要。それなくしては「自主憲法制定」などとは到底言えないはず。
- 人びとが集まって憲法のメンテナンス問題についてタウンミーティング式に自由に語り合うことが重要だと私は思う。そういう熟議なくして、「古くなったのだから、とにかく改憲してみればいい。それで問題があったら、またあとで変えればいい」などと軽く考えて国家の根本をとっかえひっかえし始めるのは、百年の愚行である。
- 国会内の憲法調査会で、政党政治家が議論して憲法改正案を策定し、国会に提出し……といった方式は、憲法制定という国家創設行為にそぐわない。
- 憲法は、人民が人民自身に「自主的」に与えるものであり、かりに憲法を改正しようというのなら、人民の間で広範かつ活発に論議されることを要する。
- 憲法論議は、一部の政治家や専門家の独占物であってはならない。ここでは、代議制という「民主主義的」手続きそのものが疑問視されなければならない。
- 憲法とは、人民の相互約束によって成立するものである。その約束をとっかえひっかえするのは、約束をみずから破棄することであり、自分たちの存立基盤を自分で掘り崩すことに等しい。みずからの誓いの言葉を裏切れば、自分で自分が信用できなくなる。
- 約束は交わされたあと、再確認されることで、そのつど新しくされる。以前からあり現にある世界を愛することと、未来に向かって新しく始めることとは、立派に両立する。
- 「革命の哲学」は「憲法の哲学」におのずと展開することを、『革命論』は教えてくれる。
- 始まりの保持・^{メンテナンス}存続がいかに未来志向であるか、考えさせられる。
- 「宮城県美術館の現地存続を求める県民ネットワーク」が「宮城県美術館の百年存続を求める市民ネットワーク」に改称されたことは、多くを物語る。真に優れたものは百年いや千年経っても新しいものであり続ける。そういう新しさをめざすのが「革命精神」。